

人間形成としての音楽

奥 野 敞 之

Hiroyuki Okuno

現在、音楽教育とはと問われて、……である。と即座に確答することは難しいが、音楽が人間に及ぼす影響力は、もう周知の通りである。人間教育にとって音楽は欠かせないものの一つとして 今日まできている。

音楽辞典にでてくる「音楽教育」との項目を見てみると、普通教育の一環としての音楽教育、即ち、幼稚園、小学校、中学校、高等学校での音楽科がそれに当る。専門教育の中での音楽教育は、音楽家、音楽学者、音楽教育家等を養成しようとする音楽大学での、音楽を専門に学ぶ者のする 専門的な技能の習得や、専門的理論の研究を指すとある。普通教育の音楽教育の目的は、音楽の美的感情を育成することによって、情操を高め 人間形成に資することである。

我が短期大学にも幼稚園、保育所、施設保母を目指し、毎年100人に近い学生が入学して来るが、その学生達に あなたは音楽は好きですか？と質問すると、必ずといっていいほど約半数位の学生が、苦手であると答える。好きか 嫌いか であって、得手 不得手 の問題ではないことを強調すると、その半数位が好きではあるが、読譜は苦手、歌を唱うことは嫌い、聴くことは好きではあるが、通論、コールユーブンゲン、聴音は嫌い、ピアノが弾けないから音楽は嫌、通論が難しいし、理解できないから音楽は嫌いであると、曖昧な言葉が増えてくる。無理矢理自分は音楽は嫌いなんだと、暗示にかけている様にも思える。

不思議なことに、楽譜が読めない、音痴、ピアノが弾けない、声が出ない等の理由は、本来音楽を音楽として楽しむということからすると、然程重要な位置を占めていないのではあるまいか。勿論、これらの行為が伴えば、より一層それを楽しむことが出来る、ということは確かである。また、好き、嫌い感も当然ついてまわるものである。併し、入学後暫くして、学生達との遠足とか、コンパなどで、カラオケ設備のある場所に行くと、実に伸び伸びと、目を輝かせて歌を唱う姿を見るのである。唱うだけでなく、4ビート、8ビートのリズムを身体で感じながらである。そんな光景を見ると、本当に音楽するということの嫌いな者はいないのでは、と思う。ただ、授業と名がついたり 学校という枠がつくことによって嫌いになるのではないか。

では何故、この様な奇妙な現象になってしまうのか、私の授業の中で、学生が提出してくるレポートの中に 頻々と出てくる文章を要約しながら、 考えてみる。 自分は、自分の音楽体験の中に 子供の頃 幼稚園などで皆んなで唱った、遊びの中で唱った、母親が唱って

くれた歌の思い出、また小学校では、音楽を先生と一緒に、皆と一緒に楽しんだこと、唱ったこと、合奏したこと、仲間同士の対話、音楽することの楽しさ、人間関係の楽しさ等、の思い出が残っていて、この頃の音楽体験を楽しかったと記す学生が断然多い。ところが、そんな学生達も、中学時代の音楽体験になると何を習ったかすら忘れてしまい、音楽体験での感動も非常に薄く、嫌な授業だったとか、嫌いな先生だった、という反応が学生の中に多くなっている。小学校の頃からピアノ教室に通っていたのに、中学校では勉強が忙しくて止めました、との話も多い。

その理由を考えて見るのに、現代の学歴社会にあって、今は誰でも高等学校に入学する、あまりはっきりした目的も持たず学校さえ出ておけば式で、中学校に入るとすぐに、高校受験準備という入試入試の難関に向う段階に置かれてしまうのではないか。音楽は、高校入試科目にはないし、生徒達にとって音楽という教科目は重要な価値を持たない科目になっていってしまうのではないだろうか。

そんな中で、歌を唱う、楽器を奏する、皆で合唱する、合奏するなどの体験はするにしても自主的に音楽体験し深めることも少なく、況や楽典、音楽するに関する技術等、より努力の必要なものは、どんどん自分の体験から外してしまう傾向にあらう。現に「中学時代の音楽の時間は、息抜きの場でしかなかった」と明言している学生もみられる。

しかし、中学時代に、クラブ活動やサークル活動を通して、素晴らしきとしての、何等かの音楽体験をして居る者も、少数ではあるが居る。彼等は受験勉強の忙しさの中で、周囲の理解もあって、幸運にも！その様なゆりの時間が持てたのであるが、全体的に見ると、この年代での音楽は、一番必要な時期であるにもかかわらず、軽視されているのではないか。また、中学生の頃の思い出の中で、教わる側の意見で注目したいのは「私達は、もっと色々な音楽、ポピュラー、フォーク等をしたかったのに、教科書に出てくる曲を歌うことや、楽典を教え込まれる授業でしかなかった」という。この様な状況の中の中学生在が、情操教育の一環である音楽体験を十分に受けられるだろうか？しかも必要な時期にである。

生徒達の感覚感情も満足させられぬまま、その教師の既成音楽感によって、読譜力、楽典、歌唱力と、一方的な評価で順位までつけられてしまう。美的感情を育成することによって、人間形成に資する目的で行われる音楽教育が、現状では、音楽を頭だけで、また、指だけで解ろうとする感動ぬきの音楽体験に仕向けてしまっているものだろうか。

高等学校に於ける音楽は「芸術」と称して、美術、書道、音楽の選択科目にされている。当然のこと乍ら中学校で苦い思い出のある者は、意識的に書道、美術という科目で芸術的体験を補うようになる。音楽を選択した学生に、内容を訪ねてみると、やはりコンコーネ、コールユーブンゲン、教科書の歌、鑑賞との内容ではあるが、実質は読譜訓練、発声訓練という技術主体の授業である。

この様に見てくると、学生達の実際に体験したがっている音楽授業を、満足させうる技

量や度量を有する教師がいるだろうか。

現在教師に成る過程が二通りあると思う。音楽大学を出て教師になった者、教育大学教育学部を出て教師になった者、前者は演奏することを主体とした体験である、後者は教育することを主体とした体験である。また、日本の教育の担当部分は、中学校 高等学校では、音楽の専科教師、小学校では 全教科をクラス担任が一人です。全科担任制である。両者の得意とする分野で、互いに接点を見つけ合うことが必要ではないだろうか。

さて、現在の教員養成機関（当短期大学も）でのカリキュラムの中の音楽で、将来教師になるべき学生の養成が充分出来るのだろうか。現に今いる学生の音楽体験を、より一層豊富なものにするのに精一杯であって、将来 学生が教師に成って、生徒、子供達に与える教育内容や 教育方法は、理論としてだけで、学生達が音楽体験の上にたった 内容、方法までに達するには、時間も無き過ぎるし、学生達の体験して来る音楽体験も少なすぎるのである。

短大という二年間の短い期間に、音楽的体験を どれ程補充できるか、疑問である。

彼等が、自分の将来進む道（目的）に 意欲的であり、人間関係に恵まれた者であれば、必ずしも音楽の得意な者ばかりでなくても良い、その意欲 音楽（勉強）が好きで何かをしたい、表現したいと目を輝かせ求める姿には、いくらでもそれを手伝ってやれるが、音楽（勉強）が嫌いで、物事に依存型の者になると、音の世界から難しい要因、嫌な要因を取り去って 本質的な楽しむ授業を 体験させることすら 難しいのである。例えば馬を水辺までは容易に連れていかれるが、飲ますという方向づけは困難であるの様にである。

過激な受験競争での学校生活を送って来た学生の一部は、大学に入学した事のみに安心し、自分の行動や生活に 無気力な態度が見られるし、形の整った日常生活、授業は無難にこなすが、自らが創造していく日常行動、授業になると、平均値を保つ努力のみで、しかも受身の形から抜け切れぬ姿を見るにつけ残念に思う。

幼児教育に於ける音楽活動の中のピアノは 必要ではあるが、絶対にピアノでなければならないということでもないが、音楽活動の中では 便利な楽器でもあるし、表現力に於て、巾広く使えるピアノを、完璧とまで行かなくとも 修得した方がより良いと考えられる。

大学に来るまで ピアノに触れたことのない学生も 何割か居る現在（少々の経験者のある者も居る）、二年間の短い期間、ピアノ主体の現行の授業で どれほどの音楽体験上の効果をあげることが出来るか、現状を見ると危惧の念にかられる。

保育の現場から「ピアノの弾ける人」との要望に応えるべく、大学でもピアノを指導する訳であるが、現状では ピアノを弾くのに必要な指の訓練を バイエル教本に主体を置き、少し曲らしく成って、ブルグミュラー、ソナチネで後に童謡なり必要なピアノ作品というパターンが多い。確かに一年間でバイエルを終了してしまう学生もいるが、童謡などの伴奏になると おぼつかない。その理由として見られる事は、バイエル教本の上辺をかじったに過ぎないからではないか、時間的にいっても そうならざるを得ない事情もある。ましてや初

めてピアノに触れる学生にとって、バイエル、ブルグミュラー、という道筋を通るのは 容易でないにも拘らず、それに応えなくてはならないと 必死に訓練を強いられるのである。それも、この音は第何間にあるから 鍵盤上はここ、という機械的な作業にのみ没頭し、楽譜を読み取る作業まで 省略してしまい、ましてや、音楽美的感情等に 自らの感覚を高める余裕など あろうはずもないのである、

ここで我々が考え見直すべき点があると思う。

勿論、訓練という行為は避けられないが、教える側の概念的な音楽達成理論に基くものでなく、その個人の個性的な 音楽感情に基づいた訓練でなければならないと思う。余りにも、熱心に音楽体験させようと思うあまり、一見、合理的な訓練方法のみになりすぎてはいないか。

音楽はもともと人間の生活ほ中から生れ、人々の心の欲求を反映したもので、芸術教育は心を育て、もっと自然な心で正義を愛し、美しいものを美しいと認め、素直に感動し、人の痛みがわかる、感じとれる、そんな素朴な人間の感性に関わるものであったはずである。が故に、訓練途中に学生とのコミュニケーションを多く持って、もっと人間の根本にふれる原形的な心の動きに関わる所のものが必要ではないか。音楽と教師と学生のバランスのとれた信頼関係とか！

今現在、自分のしている行為を 周囲の社会に何如に働きかけるか、自分が練習し弾いている旋律が自分の心の世界に及ぼす影響とか、自分の弾いている和音の原風景との関わり、自分のこの世に於る存在価値の様な内面的な働きかけ、アドバイスがあってこそ学生が自身の生活行為と音楽行為との関わりを再認識できるし、自分自身 自問自答して内面的な世界を充実させて行くことができるのではあるまいか。またこの様なことによって音楽を自分の為の音楽体験とし 楽しむ経験が出来ていき、前述の様な内面的なものが深まるにつれて 楽しい度合も深くなるものと考ええる。

音楽的感動を忘れかけ、指の訓練や楽譜と悪戦苦闘している彼等にとって、自分の思い出に残っている好ましい音楽体験を再現することが 大切な一面であろう。例えば、指の良く動く人は鍵盤楽器、弦楽器等器楽合奏の分野なら何んでも良い。歌うことの好きな人は歌うことから、何も出来ない人は鑑賞することから、とにかく音のある場に身を置いて、今まで気にもとめなかった音に気づき、美しい音に気付き、美しい音楽に気付き、触れていくこと、どんなにその過程がスローテンポでも、稚い演奏であっても良い。音を音と感じ、その音に何かを感じ何かを創造し始めた彼等の努力を認め 心から接することによって、更に音楽に対する興味や意欲を高め、音楽を心から楽しみ 豊かな感情も育つと考えるのである。

これらの事が、本来の教育の目的であろうし幼児教育に於ても、人間形成上の大切な心の要素と成り得ると思うからである。

楽器の手作り

子供達は、遊び乍ら育って行く。彼等は遊びの内でも、取り分け音を出すことに興味がある。これは若しかすると、原始の時代にそうであったと思われる様な、嬉しいにつけ悲しいにつけ 太鼓を叩き 踊り回った人間本来の情動や、相手に自己の意志を伝達しようとする働きに、端を発して居るのかも知れない。楽器らしい物のなかった頃、彼等は何の音を耳にしたであろうか。地震の地鳴、雷鳴、梢を渡る風、嵐等々であろう。そして快い音に接すれば、それを自分の物にしたかったり、先ずは自分の声で真似て見たりし、何かの拍子に音の出る物を見つけて、それを工夫し行ったに違いない。

それは、自然に対する恐れから、色々な音に神々を感じ信仰としての真面目な音の世界であつたろう。

今の文明社会では恐怖の要素は少ないかも知れないが、人間にとって音は心の内に直接働きかける新鮮な驚きの世界の一端であろうと思われる。

生まれるからテレビが目の前にあって、ともすれば受動的な毎日を送る子供達に、子供達の好きな音の世界で 能動的な体験をさせるという意味で、楽器を作らせるということは価値のあることである。

楽器といっても市販されている様な楽器でなくても、至極簡単で原始的で良い、紙やビニールを貼った太鼓、竹を切った笛、弦を一本だけ張った琴等、自分達の身近にある材料で容易に加工できるものです。子供達は、造形も彩色も、創意工夫し自由にのびのびとする。そして偶々、音の出る物が出来た時どこのお店にもない、買えない、只一つしかない自分の楽器に愛着を覚えるようになり、更に、彼等は指導者の適切な導きに因り、もっときれいな音を目指し音のもっている無限の可能性に気づき、もっと表現力豊かな楽器に興味を示すように成るだろう。

この時点迄を考えても、素晴らしい体験となるし、それは原点から辿った一つの音楽への入口になりはすまいか。

①サムピアノ

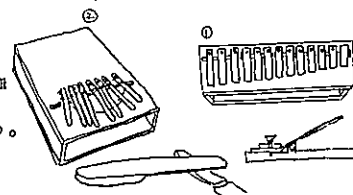
刃がねの振動体に、共鳴箱（45cm×15cm）をつけたもの、刃がねの加工は金バサミで出来る。

②竹のサムピアノ

木箱の上に竹を削り振動体として付けたもの。竹の幅は5mm位。音の高低は竹の厚さを変えたり、長さを変えると出来る。

③アルミ棒の鉄琴

5mm厚のベニヤの共鳴箱に、直径1cmのアルミ棒で作る。径数を大きくしていくと、音色・



音高とも違って楽しい物になる。又、材料も木や竹、粘土等色々出来る。音の高低は④に示す様、材料の中央部を削ると低く、切口を削ると高くなる。尚、振動体を固定する時⑤に示す。振動体の節を固定させないと響きに影響がでる。また、鋼材を切断の時、高速回転のグラインダー等を使うと相当に熱を持つし、音程にまで変化が来るので注意。

④に示すのは・基本振動の腹①と倍音振動の腹②である。本琴の場合の音作りはこの腹を調節することによって音を作る。

これ等の物の音を正確にとるためには、⑥に示すように、音が一オクターブ内に集められた時の振動比率と、その係数から各音の振動体の長さの比が求められ、振動体の材量の長さの目やすが出るが、使う材料により一様でないので、最後には自分の耳を頼る作業しかない。オクターブ上にするには2で割・下にするには逆にすれば良い。

例えば ドの音の材料が10cmだとする、レの音は $10 \times \frac{1.777}{2.0} = 8.885\text{cm}$ 、ミは $10 \times \frac{1.599}{2.0} = 7.995\text{cm}$ と求められる。

④のれん

材料は何んでよい。長さ、太さ、材質の違いでの音を楽しむ。

⑤リードのついた竹笛

リードは写真のフィルムを使用すると良いが、できればもう少し薄くしたい。

⑥一弦琴

カセット箱に駒を置き、輪ゴムを通し撥じいて弾く

箱を木箱にし、材料の違う弦（ギター、バイオリン、大正琴、琴等）を使うと楽しく、箱を大きくすれば駒の位置によって音程をつくることも可能である。

⑦パンの笛

竹を使うが、塩化ビニールのパイプでも良い。音程調整の時、粘土かスライド式の装置が出来ればもっと他の用途、半音の音程もできる。また一人で全⑧部の音を作らなくとも一人一音で何人かですることも良い。

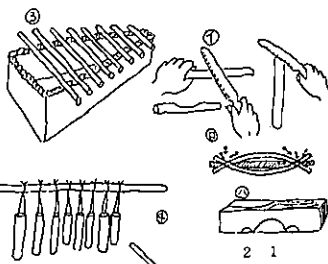
⑧ケイナ

外径1.5~3.0cm位の竹40cmで作るが、この楽器は調整孔を持つ楽器です。その調整孔での音が基音となります。また歌口もU字とV字とありますが、U字の方が容易に加工でき音が易い。また尺八の様な歌口でも良い。音の調整は指でおさえる穴の大きさでするので、初めは小さな穴からするのが良い。更に、穴だけあけておいて各自の耳で大きさを調整するのも良い。

⑨アंकロン

オクターブ離れた二つの竹筒を振って音を出す。この楽器は音程をとるのに難しいし、細い細工が多いので時間もかかる。

⑩粘土で作った茶碗



径が10cm位で大中小を作る。素焼(800°)した段階で音程をつけ、上薬をつけて本焼にする。本焼1290度で焼くと、音程が5度上ってしまった。他に粘土で作った木琴(粘土琴)を作ったが、焼くごとに音程が変ってしまう。数多く作って音程調整するしかないのか。思案している。

以上、あたま主体の音楽・感動不在の音楽をぬけ、人間の根本にふれる音楽体験を今しなければならぬのではないか。

楽器作りを通して一歩前進したいのである。

⑪ 振動数比									各音の振動比	
音名	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	イ	ロ	ハ	C	2
分数比	1	$\frac{9}{8}$	$\frac{5}{4}$	$\frac{4}{3}$	$\frac{3}{2}$	$\frac{5}{3}$	$\frac{15}{8}$	2	C#	1.88
音程関係比	24	$\frac{9}{8}$	27	$\frac{10}{9}$	30	$\frac{16}{15}$	32	$\frac{9}{8}$	D	1.77
整数比	36	$\frac{10}{9}$	40	$\frac{9}{8}$	45	$\frac{16}{15}$	48		D#	1.69
等しく分けられた半音の振動比率 1.0 5 9 4 6 3 1									E	1.59
									F	1.49
									F#	1.41
									G	1.33
									G#	1.27
									A	1.19
									A#	1.13
									B	1.06
									C	1

参 考 資 料

音楽と教育	小学校音楽教育講座	音友社
幼児の音感教育	酒田富治	〃
季刊音楽教育研究	35号	〃
音楽教育学の展望	音楽教育学会	〃
音楽科教育実践学	高山清司	ドレミ楽譜
手づくりの楽器	石井正子	誠文堂
音楽とともに	伊吹山真帆子訳	全音出版
ケイナの吹き方	宮川隆子	東京楽譜出版
新音楽辞典		音友社
楽器のおはなし	繁下和雄	〃